

# 結

「……私が殺したようなものだ」

あなたはずっと、後悔していました。

自らの発言が、疑いあいの席が設けられるきっかけになったと。  
そのせいで、お互いを傷つけあう場が生まれてしまったと。

「私があの時もう少し違うことが言えていれば……。  
事件自体が、起こらなくて済んだかもしれないのに」

時間の長さの違いこそあれ皆、今まで同じ場所に生活していました。  
この話し合いが起こるまで皆、よき隣人であったのです。

その隣人たちのいずれかが、人の定義から弾かれるべきなど。  
果たして神ならぬ身に言えることなのでしょうか？

あなたは気付くことができました。  
でも、そうでなかったものには裁きが必要だったのです。

「いや。神ならぬ身では、救えないものもある、か」

「……私はこの罪が許される日まで、すべてを抱えて生きていきます  
だから、どうかあなたも顔を上げて」

「貴方の罪も。きっと、ゆるされる日が来ます」

+++++

END-M-1：『定義の在処』